

トマト黄化葉巻病対策に取り組んで

トマト黄化葉巻病という産地を揺るがす難防除病害が発生し、普及センターを始め関係機関が連携して、マニュアルの作成による迅速な情報提供、対策技術の普及に取り組んだ。これらの活動により、生産者が病気の原因、それに対する対策を理解し実践することで管内のトマト生産は減少することなく産地力が維持されている。

内 容

トマト黄化葉巻病は、1996年に日本で初発生が確認されたウイルス病で、媒介昆虫の根絶が困難なことから難防除病害とされている。

2007年、疑わしい症状の株が管内で発見され、県立農林水産技術総合センター（以下技術センター）により黄化葉巻病と診断された。



黄化葉巻病の発病株

ほ場によっては全株の抜き取りが必要な激発ほ場も見られた。また、媒介昆虫であるタバココナジラミには、薬剤抵抗性が高いバイオタイプQが含まれることがわかり、農薬防除がさらに困難になった。

次々と発生ほ場、被害報告が増加する中、ウイルス確認作業、対策指導等に追われた。

現場の混乱防止や一貫した指導のためには整理された正確な情報の提供が必要であり、急遽^{きょ}神戸地域独自のマニュアルを2007年12月に作成した。マニュアルには、ウイルスの特徴、感染の仕方、対策、発見からウイルスの確認までの手順、防除薬剤などを整理した。

2007年は、病気の発生から現状把握、マニュアルによる情報の提供、罹病株の抜き取りをすばやく

対応したため翌年以降の発生を抑制できた。

最も効果が高い対策は、侵入防止のため施設のすべての開口部へ0.4mm目合いの防虫ネット（以下防虫ネット）を被覆することである。しかし、防虫ネットの被覆は、施設内の通風を悪くし、温度上昇も起こるため、当初は導入がなかなか進まない状況が続いた。普及センターは、講習会等を通じて黄色粘着資材利用も併せてねばり強く指導した。その結果、2009年度に防虫ネットは、大型ハウスを持つ専業農家を中心に導入農家数3戸67aから12戸250aに増加した。現在、防虫ネット被覆による施設内温度の上昇に対応するため技術センター、ノズルメーカーと連携し、細霧と循環扇を併用した細霧冷房技術の確立を図っている。



黄化葉巻病講習会

黄化葉巻病の発生は年次によって大きく変動するため、今後もJA部会での研修会等で情報提供をJAと協力して行う必要がある。また、新しい対策技術を早急に現地導入できるように試験研究と協力して積極的に取り組んでいきたい。

岡本 直樹（神戸農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：078 - 965 - 2102）